

広島県教育委員会平成19年度教員長期研修成果報告概要書

児童の自己肯定感を高める教育相談の在り方 —構成的グループエンカウターの実践を通して—

嶋田進吾

安芸高田市立吉田小学校

問題と目的

今日の学校現場では、いじめ、不登校、問題行動などの学校不適応現象が大きな問題となっている。これらの問題の背景として、現代社会において見られる人間関係の希薄さや学力偏重といった風潮があげられる(星野・正保, 2003)。こうした風潮は子どもたちにも影響を与え、コミュニケーションの方法がわからないため、友達との関係をうまく築けなかったり、学力以外の個性を認められなかったりする中で、自己肯定感が低くなっている児童も少なくない。自己肯定感とは自分自身の存在に対する認識として、自己の身体的な特徴や能力や性格などについて肯定的に考えたり、感じたりする感情である(中島, 2003)。この感情が低いと、子どもたちは自分を否定的に見るため自信がもてず、他者との関わりにおいて、遠慮、緊張、防衛といった感情が働き、子どもたちの人間関係は表面的なものになる。その結果、学校には来ているものの学習意欲は乏しく、学校生活に意味や価値を見いだせないという状況に陥る(片野, 1996)。このような児童の問題を受け、学校現場において、個を対象とした治療的教育相談だけでなく、集団を対象とした発達支援的な活動が行われるようになってきた。この発達支援的な活動で、最も注目され、実践されてきたのが構成的グループエンカウターである(栗原, 2002)。構成的グループエンカウターとは、開発的教育相談の一技法で、心と心のふれあいと自他発見を目標とする集団学習体験であり、リーダーが用意したエクササイズで、作業や話し合いなどの活動を行うものである。その効果としては、児童の自己受容の高まり(小野, 2003)や共感性の向上(山中, 2001)が報告されている。また、岡田(1996)は、心の交流のあるあたたかい人間関係がいじめや不登校を予防し、構成的グループエンカウターの理論と技術を導入することによって学級にあたたかな人間関係をつくることができると述べている。さらに、諸富(2002)は、防衛がとれて本音が言えると、子どもたちは、学級集団にあたたかさを感じ、不安を感じなくなり、学級を「居場所」と感じる。そうなるための一方法として構成的グループエンカウターの手法を生かすことができると述べている。

そこで、本研究は、本校3年生・5年生児童を対象に、自己肯定感を高めることをねらいとした構成的グループエンカウターを実施し、その効果(自己肯定感、学校生活意欲度、学級満足度)を検討することを目的とする。また、本研究では、構成的グループエンカウターの効果をより明確にするために統制群を設定して実施群と比較検討した。

方 法

対象者 構成的グループエンカウンター授業の実施群は、小学校3年1組29名（男子12名、女子17名）と5年1組35名（男子18、女子17名）であった。実施群と比較するための統制群は、小学校3年2組29名（男子13名、女子16名）と5年2組36名（男子17、女子19名）であった。なお、統制群では実施群の終了後に、構成的グループエンカウンター授業を実施した。

アンケート用紙の構成 構成的グループエンカウンターの効果を検討するために、第1回授業日（プリテスト）と第4回授業日（ポストテスト）に以下に示すアンケート用紙への回答を求めた。①自己肯定感：岸（1997）の肯定的自己概念尺度（15項目4件法）。②学校生活意欲度：河村（2004）の学校生活意欲度尺度（9項目4件法）。③学級満足度：河村（2004）の学校満足度尺度（12項目4件法）。

アンケートの分析方法 独立変数を群（実施群／統制群）と学年（3年生／5年生）、従属変数を各尺度得点の変化量（ポストテスト－プリテスト）とし、共変量をプリテスト得点とした2要因共分散分析を行った。

構成的グループエンカウンターの実施方法 1月23日から1月31日までの間に計4回の授業実践を学級活動の時間に行った。時間は1回が45分であった。筆者がリーダーとなり、サブリーダーとして1名の大学院生と学級担任が参加した。

第1回では、エンカウンター初回ということで、身体活動を重視し、まず、楽しみ、同時に友達の好みを知りながら友達の輪を広げていくことを目的として「なんでもバスケット」というエクササイズを選定した。

第2回では、2つのものを選ぶときの理由を交流する中で、自分の考えに気づいたり友達の考え方に触れ、その違いを理解し、友だちを受け入れる態度を育てることを目的として「ご注文はどっち」というエクササイズを選定した。

第3回では、いやな気持ちになる言葉とうれしい気持ちになる言葉を言ったり言われたりする体験を通して、お互いの気持ちを交流し、受容的な集団づくりを行うことを目的として「ふわふわ言葉とチクチク言葉」というエクササイズを選定した。

第4回では、プラスのフィードバックを交換しあい、友だちを思いやる大切さに気づかせるとともに、自分を受け入れ、自己肯定感を高めることを目的として「Xさんからの手紙」というエクササイズを選定した。

結 果

自己肯定感の変化

分析の結果、全体の自己肯定感の変化量に群の主効果が認められ、実施群が統制群よりも自己肯定感が有意に上昇していた（ $F(1,107)=21.10, p<.001$ ）（図1）。また、交互作用が有意であった（ $F(1,107)=5.41, p<.05$ ）。下位検定の結果、学年別にみると、3年生において実施群が統制群よりも有意に上昇しており、5年生においては、実施群が統制群よりも有意な差はないが上昇傾向が見られた（図2）。

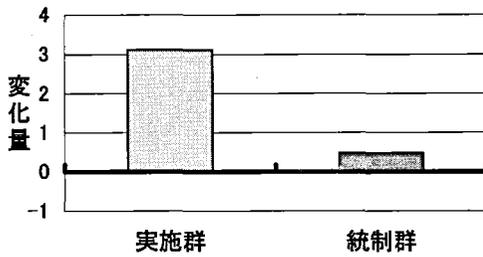


図1 自己肯定感の変化量（全体）

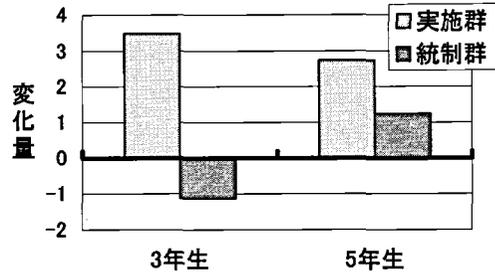


図2 自己肯定感の変化量（学年別）

学校生活意欲度の変化

分析の結果、全体の学校生活意欲度の変化量に群の主効果が認められ、実施群が統制群よりも学校生活意欲度が有意に上昇していた ($F(1,102)=4.02, p<.05$) (図3)。また、交互作用は有意ではなかった ($F(1,102)=1.29, n.s.$)。しかし、下位検定の結果、3年生において、実施群が統制群よりも有意に学校生活意欲度が上昇していた (図4)。

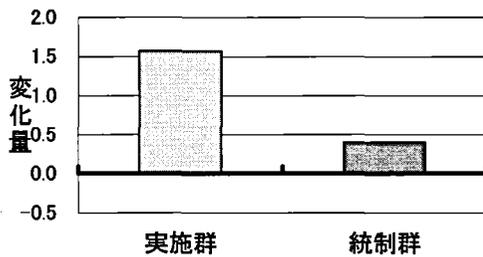


図3 学校生活意欲度の変化量（全体）

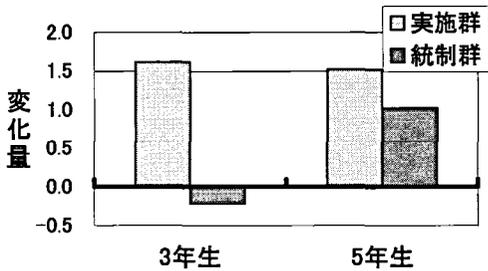


図4 学校生活意欲度の変化量（学年別）

学級満足度の変化

分析の結果、全体では、実施群で上昇傾向が見られた ($F(1,101)=2.95, p<.10$) (図5)。また、交互作用が有意であった ($F(1,101)=5.62, p<.05$)。下位検定の結果、3年生では実施群の方が統制群よりも有意に学級満足度が上昇していたが、5年生では有意な差は見られなかった (図6)。

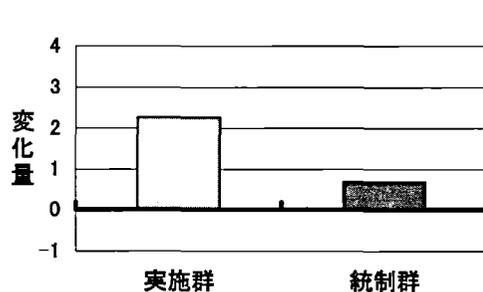


図5 学級満足度の変化量（全体）

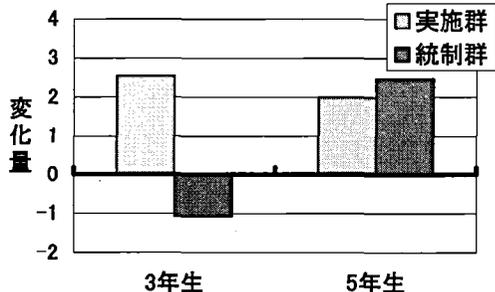


図6 学級満足度の変化量（学年別）

考 察

本研究の目的は、小学校3、5年生の児童を対象として自己肯定感を高めることをねらった構成的グループエンカウンターを実施し、その授業効果を検討することであった。構成的グループエンカウンター実施群では授業後、自己肯定感、学校生活意欲度の各尺度得点が有意に上昇していることから、構成的グループエンカウンターは、児童の自己肯定感、学校生活意欲度を高めていく教育相談の一技法として有効であることが明らかとなった。今回の構成的グループエンカウンターの授業実践で、有意な効果が認められた要因として次のようなことが考えられる。まず、授業を工夫した点である。実践した4つのエクササイズにつながりをもたせ、児童が次回を楽しみに感じていることがふりかえりカードの記述から伺われる。1回目は、ゲーム性の高いものを実践し、「エンカウンターって楽しい。」と実感させることができた。2回目では、1回目で不十分であった自分についてじっくり考える活動を通して、自己理解を進めることができた。そして3回目では、ロールプレイを通して、今まで気づけなかった友達の気持ちに共感させることができた。最終4回目では、自分のよさをしっかり認めてもらうことで、十分自己受容することができた。このようにエクササイズにつながりをもたせるという工夫が児童の自己肯定感の高まりにつながったと考えられる。次に、リーダー、サブリーダー、学級担任という3人体制で授業実践に臨んだことで、児童に肯定的なフィードバックを行うことができた点である。エクササイズやシェアリングの場面で児童の発表やつぶやきに適切なフィードバックができたことが、児童の学校生活意欲度の高まりにつながったと考えられる。

今後の課題としては、3年生、5年生全体としては、構成的グループエンカウンターの効果が認められたが、学年による違いがあった。その要因として今回使用したエクササイズの内容が5年生よりも3年生の発達段階に適していた可能性が考えられるので、学年の発達段階を考慮したエクササイズの選定や、使用尺度の信頼性の検討が必要である。また、今回は、9日間に4回の授業実践という短期集中型で、しかも、3学期という学年のまとめの時期に実践したものであるが、4月初、いわゆる学級を創り上げていく時期の効果研究も必要である。さらに、長期的な効果研究も必要である。

引用文献

- 星野治子・正保春彦 (2003). 小学校における構成的グループエンカウンターによる自尊感情育成の研究 茨城大学教育実践研究, 22, 63-64
- 片野智治 (1996). エンカウンターで学級が変わる—小学校編 図書文化社 pp.18
- 河村茂雄 (2004). QUによる学級経営スーパーバイズ・ガイド—小学校編— 図書文化社
- 岸 俊彦 (1997). 肯定的自己概念の発達の調査(3)—日米比較— 明星大学研究紀要—人文学部—, 33, 38-49
- 栗原慎二 (2002). 新しい学校教育相談の在り方と進め方 ほんの森出版 pp.21
- 諸富祥彦 (2002). エンカウンターで学級づくりスタートダッシュ! 図書文化社 pp.18
- 中島紀子 (2003). 教育用語辞典 ミネルバ書房 pp.220
- 岡田 弘 (1996). エンカウンターで学級が変わる—小学校編 図書文化社 はじめに
- 小野直美 (2003). 生徒の自己理解を深め、自己受容の態度を育てる構成的グループエンカウンターについて 教育実践総合センターレポート, 22, 54-69
- 山中佐喜男 (2001). 構成的グループエンカウンターと学級経営—小学校低学年「きらきら学級」の実践を通して— 情緒障害教育研究紀要, 20, 83-88